

～ セピア色の風景 ～

「砂利の街道」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

私の住む家の前方には、街（中村）から太平洋に向けて、飯豊地区を横断する俗称・磯部街道（福島県道74号原町海老相馬線）が走っている。

中学時代までは砂利道だった。もつとも、先の大戦前の時代、母親が街の女学校に通うころ、街の手前まで裸足で歩いた（通学用の下駄がすり減るのを避けるため裸足で歩き、街に入る手前の小川で足を洗い、持ち歩いてきた下駄に履き替えたとのこと）というから、それ以前は草の生えた土の道だったのは明らかだ。その砂利道をクルマが走ると、大変な砂煙が舞った。遠くから見てもその砂煙で、クルマが走っているのが分かったものだ。

ながら運転する術を、父親から指南された記憶がある。またその砂利がクルマで弾かれるので、歩行者はもちろん自転車・バイクの運転者も、気を付けなければいけなかった。それによるけがは、全て自己責任の時代だった。

街道は時折、グレーダー（除雪作業で見かける下面に斜めの鋼板が付いた重機）で表面を削り、また全面に砂利が敷かれた。表面が削られた直後は平らでいいが、間もなく轍ができて、また砂利が敷かれた後しばらくは締め固められていないため、タイヤが砂利に埋まり自転車・バイクは難儀した。そんな時、街近くの統合中学校へ自転車を通う私は、道のりは長くなるが、街道に沿う曲がりくねった里道を急いだ。

待避場」と書かれた札が立つた。

街と郊外をつなぐ街道は、歩く人、リヤカーを引く人、糞を置き土産に進む馬車、ヘルメットを被らない自転車・バイク、黒い煙を吐くオート三輪、三角窓のあるクルマ、正面にクランク棒を差し込む穴のあるトラックなどが往来した。

時は進み、砂利道は簡易とはいえアスファルト舗装され、道路端に引かれた白線がまぶしかった。寒風の中、その街道を「小学生は歩き、中学・高校生は自転車を通じているのに、大人は店屋の前のバス停でバスを待つとは……」と嘆く父親の声が、砂煙の街道の風景とともに耳に残る。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める